

嘘をつかない医療

清水陽一

新葛飾病院長

いまは学生が非常におとなしいんですけども、
ぼくのころはずいぶん荒れてましてね。ムード
に流されたのかもしれないけど、ぼく自身も、
弱者への思いをもって、差別との闘いに加わっ
ておりました。

医学生時代、大病院の医療事故を告発しま
した。三五年前になりますから、医療事故なん
て取り上げられたことのない時代、かの有名な
東京医科大学でのことでした。

弁護士とか訴訟とか全然わかりませんでした。
けつきよく被害者も家族もついていけなくなっ
てしまつて失敗し、私も落ち込みました。いま
敵討ちのために東京医大の医療を告発しており
ます。でも医療事故を反省することなしでは病
院は進歩しないと思つていますので、私は正し
いと信じておこなっています。

父はA.I.Sで、ずっと私が面倒をみておりまし
たが、末期のころ結核を発症しました。個室に
入つて人工呼吸器になつたんですが、呼吸器が
外れてしまつて脳死状態で見つかり、亡くなり

ました。

ぼくより先に病室に駆けつけた母親から、「殺
されちゃったよ」つて言われました。その言葉
はいまだにぼくの心に残っております。

院長としてのころがけ

ぼくは医師として、患者さん側に協力しなが
ら、ずっとやってきました。それがなんの間違
いか院長にしてみらつたもんだから、まあやり
たい放題やつております(笑)。

第一に考えたのは、トップダウンとボトムアッ
プ、モラルとモチベーション、そして職員を大
切にする、ということですね。それが患者さん
を大切にするにつながるんではないかと思
います。

だいたい虐待する親というのは、親から虐待
されているといわれています。それと同じで、
医療の質のためには、院長として職員をどのよ
うに大切にするかを考えたい。……この会場の
うちの職員が一人いるんですけど、そんなの嘘

だよ、と言うかもしれませんが(笑)。

それから、三つのP——フィロソフィー、プ
ラクティス、パッション——が大切です。どう
いう病院をつくっていくのかという「理念」、そ
れをどんどん「実践」に移していくこと、それ
から「情熱」です。

三つのVも必要です。これは日野原重明先生
があげたキーワードなんですけど、ビジョン、ベ
ンチャー、ビクトリーのことです。こころを持つ
て進めば、必ずや達成されます。

事故は起きるが嘘をつかない

ぼくが唱えたつた一つのことは、「嘘をつか
ない医療」——これしか言っておりません。

みなさんをご存知だと思いますが、医療は嘘
だらけです。わざわざ「患者のための医療」な
んて言葉があるのは、それをやつてこなかった
ということの証拠でしょう？

ぼくの病院では、診療録に嘘を書かせない。
ですからいつでも見せることができます。嘘を
書いているから見せられない。すごく簡単なこ
とです。

ただし、事故そのものは必ず起きます。起こつ
たことに対しては、嘘をつかないで、逃げない
で、隠さないで、正直に話す。そこから出発し
ます。そして最後に「損害賠償を含めて患者さ

んと話し合います」とお約束する。

ぼくは知らなかったんですけど、「賠償する」とパンフレットなどに書いている病院は、ほとんどないらしいんですね。

それから、入院パンフレットでも情報公開を何回も何回も訴えています。ホームページもありますので、ぜひのぞいてみてください。

病院長に問題あり！

なぜ、事故が事故防止に生かされないのか。やっぱり病院長に問題があるんじゃないか、と私は思っています。

事故はたいいてい、内部告発が起こってからはじめて明らかになります。裏を返せば、「自分が行動を起こして解決する」というエネルギーをもった病院長がほとんどいないわけです。

この会場で豊田さんという女性がいます。この方は、うちの近くの東部地域病院という病院で、お子さんを亡くしているんです（p.126参照）。豊田さんには、いま医療安全担当者として、うちに来ていただいています。

東部地域病院のホームページを見て、彼女は怒り狂っておったんです。なぜかというところ、病院は彼女に対して一回も謝ったことがなかったんです、実は。マスコミ的には謝ってるようなこと言ってるけれども、実際には謝ってない。

それにもかかわらずホームページには、堂々と「痛ましい事故を契機に安全週間をつくりました。病院は一生懸命やっています」というようなことが書いてあったんです。

ぼくはその院長をつかまえて、吊るし上げちゃいました、二時間くらい。電話でも吊るし上げまして。その結果、ぼくは医師会長から「あんまりいじめないでくれないかね」と言われちゃいました。ついに相手は退職してしまいました。

「いい先生」でも豹変する

問題は医師の意識なんです。

あるお子さんが入院中に突然死してしまいました。それもトイレで。モニターが付けてあったんですが、心停止してる状態が一時間とかじゃない、何時間かですね。かなり放置されていて、行っただけはもう冷たくなっていた。

そのことに関して病院側は、急にそっぽを向きはじめた。なんら答えてくれない。「あんないい先生がどうしたの？」って言われています。

やはり、本当にいい先生のように見えてもですね、実際に自分で医療事故を起こしてしまうと豹変するんですね。医者っていうのはまったく信用できないなと、ぼくは思うんです。だからぼく自身も豹変しないように、患者さんと話

したりするときは、医療安全担当者に見張ってもらいます。

地域の医療安全者を育成する

いま院内でシンポジウムを開いて、病院で起こった医療事故の被害者のご家族を呼んで、話をしてもらっています。他の病院で起こった患者、医療被害者を呼ぶんじゃないかと、まずは自分のところの問題点を指摘してもらって変えていこう、という姿勢でやっています。

それから、豊田さんがんばってかれて院内もかなり変わってきてるので、院内から院外へ、要するに「地域の病院を変えていこう」という活動もやっています。地域で医療安全者を育成するんです。豊田さんがすごくよく動いているので、いろんな人と知り合いました。

そういった人たちにもお話をしていたら、地域の病院に呼びかけて、医療安全担当者を各病院に育てていく、というような活動を始めております。

最後に、まとめとして格好よく、学生運動あたりで（笑）。

「自らの足で立ち、医療革命を起こす。この燎原の火を全国に！」

連絡先▶webmaster@shinkatsu-hp.com(新葛飾病院)
ホームページ▶http://www.shinkatsu-hp.com/

II部-1
なぜ、いま、患者さんに学ぶ？